

大正・昭和期海軍における古典的武士道論の受容

——安岡正篤の海軍大学校出講を一淵源として——

木下 宏 一

はじめに

戦前日本海軍で実施された各種の士官教育、就中精神面・思想面の「訓育」に重要な影響を及ぼしたとされる人物の一人に安岡正篤（一八九八—一九八三）^①がいる。

同人が大正一二（一九二三）年から翌年にかけて海軍大学校で行った全一〇回の講演は、近代科学技術の粋を凝らして建造された艦艇・航空機の運用を事とする海軍の合理主義的風土に和漢の古典教養——当然『萬葉集』も含まれる——に基づく武士道論的思考の根をなじませた、その先駆的意義において注目される。

本稿では、安岡の海大出講と、終了後に『海軍大学校講究録附録』（菊版冊子、総一四九頁、大二三・五―七頃印刷）として刊行・

部内有償頒布された述録『士学論講』^②を手がかりに、これまで実証的に検討されることのなかった大正・昭和期の海軍と武士道の関係性について論じたい。

一 安岡正篤の海軍大学校出講

安岡正篤が元海軍大臣でかねて親交のあった八代六郎予備役海軍大将（一八六〇—一九三〇）の紹介により、京橋区築地の海軍大学校で同校職員・学生を対象に「士学（武士道哲学新論）」と題した連続講演を開始したのは大正一二（一九二三）年、毎週水曜日の午後に設けられていた正科外の「講演」または「講話例会」^③枠での実施であった。

当時の海大校長は堀内三郎中将（一八七〇—一九三三）で、「軍政学」の教官として山本五十六中佐（のち大将、戦死後叙元帥、

一八八四—一九四三も在勤していた。^①

安岡は当時満二五歳(大正二・二・三)。東京帝国大学法学部政治学科在学中(大八・九〜大一一・三)に刊行した『支那思想及人物講話』(安黄社、大二〇・一〇)と『王陽明研究』(同、大一一・三)

——前出八代六郎との遇縁も同書を通じてのものだといふ——の二単著によつて、既に高い評価を政官界の一部に得ていた。

大正一一(一九二二)年一〇月からは伯爵・酒井忠正(一八九三—一九七二)の後援を受けて同邸庭園の金雞園に私設された亜細亜文化協会研究所(大二三・一一・東洋思想研究所に改称)に拠り、機関誌『東洋思想研究』(大一一・一一・発刊)を主たる発表の場として研鑽を続けていた。その学問は前時代の教養体系である儒教を中心とするものであったが、彼自身は「漢学者」という意識はなく、^⑥四条^⑦ 榎^⑧ 中学校卒業時(大五・三)に陽明学者の岡村達^⑨(号閑翁、元柳生藩権大参事等、一八二七—一九一九)より託された「先づ西洋思想を研究して、新しく東洋思想を普請する覚悟」と、第一高等学校第一部独法科在学中(大五・九〜大八・七)に抱懷した「近代の文明と人間生活とに対して深い疑惑」の二つを学びの根源的基盤としていた。

安岡の海大出講時期について、当人は「大正末期私がまだ二六七七の頃」と回想しているが、没後に編纂された年譜や伝記ではいずれも数え二七の年、大正一三(一九二四)年中の開講となつてゐる。^⑩だが、前出堀内三郎の校長免本職は前年の六月一日付であり、山本五十六もまた同月二〇日付で欧米各国出張

を命じられている。したがつて、じつさいは大正一二(一九二三)年の五月以前に始まつたとみるのが妥当であろう。同年八月一八日付の『海軍公報』には以下の通牒が掲載されている。

部内各部御中

講究録附録ノ件

本校ニ於テ科外講演トシテ実施中ノ「土学」(講演者陽明学研究家法学士安岡正篤講演回数十回)講演終了後講究録附録トシテ印刷ノ予定ニ付御要望ノ向ニハ実費ヲ以テ頒与可致候条左記御承知ノ上御要望部数各部毎ニ取纏メ本校副官宛御申込相成度

右通知ス

記

- 一、予定価額 一部六十銭以内ノ見込
- 二、配布予定期日 十一月月上旬刷成配布シ得ル見込
- 三、申込期限 九月二十日限トス但申込表ニハ要望者ノ官氏名並部数記載ヲ要ス^⑪

しかるに、翌月一日に関東大震災が発生し校舎のほぼ全域が灰燼に帰したため「講演中止印刷延期ノ止ムナキ」に至つてしまふ。仮校舎にて八回目^⑫が再開されたのは翌大正一三(一九二四)年に入つてからで、三月一九日(水)を以て閉講となつた。翌日付の『海軍公報』には満を持するかのように以下の通牒が掲

載された。

部内各部御中

講究録附録ノ件

本校ニ於テ科外講演トシテ実施中ノ「士学」(講演者法学士安岡正篤)今回講演終了ニ付講究録附録トシテ印刷ノ予定就テハ要望ノ向ニ実費ヲ以テ頒与可致候条左記御承知ノ上要望部数各部ニテ取纏本校副官宛御申込相成度右通知ス

記

- 一、予定価額 一部六十錢以内ノ見込
- 二、配布予定期日 七月中旬頃刷成配布シ得ル見込
- 三、申込期限 四月三十日限トス但申込表ニハ要望者ノ官氏名並部数記載ヲ要ス

帝大卒の法学士とはいえ、行政官吏でも官立学校の教員でもない一民間人の講演述録がこうしたかたちで公告されることは前後に例がなく、それだけ海軍部内における注目度の高さがうかがい知れよう。

安岡の講演を聴講した可能性がある学生は、第二期(大一〇・二二一〜大一二・二〇・二五)、第二期(大一一・二二一〜大一二・二二一)、第三期(大一二・二二一〜大一二・二二一)、第三期(大一二・二二一〜大一二・二二一)、第三期(大一二・二二一〜大一二・二二一)の甲種学生、第二期(大一二・二二一〜大一二・二二一)、第三期(大一二・二二一〜大一二・二二一)

期(大一二・二二一〜大一二・二二一)の航海学生、第二期(大一二・二二一〜大一二・二二一)、第一期(大一一・二二一〜大一二・二二一)、第一期(大一二・二二一〜大一二・二二一)の機関学生、および在校中の選科学生であった。

これらのうち、例えば甲二期には伊藤整一大尉(戦死後大尉、第二艦隊司令長官等、一八九〇—一九四五)、岡敬純大尉(のち中将、海軍次官等、一八九〇—一九七三)などが、甲二期には井上成美少佐(のち大尉、海軍次官等、一八九九—一九七五)、三川軍一少佐(のち中将、第八艦隊司令長官等、一八八八—一九八二)、宇垣纏大尉(のち中将、連合艦隊參謀長等、一八九〇—一九四五)などが、甲二期には角田覚治少佐(のち中将、第一航空艦隊司令長官等、一八九〇—一九四四)、保科善四郎大尉(のち中将、海軍省軍務局長等、一八九一—一九九二)などが、航海二期には野元為輝大尉(のち少将、第九〇三海軍航空隊司令官等、一八九四—一九八七)、富岡定俊中尉(男爵、のち少将、海軍軍令部第一部長等、一八九七—一九七〇)などが、機関二期には和住篤太郎機関大尉(のち中将、第一海軍航空廠長等、一八九〇—一九八二)などがいた。

開講劈頭、八代六郎の講師紹介を受けて登壇するや「但だ曲げて人情に順つて、即ちやむにやまれぬ大和魂で此の座に上つたのである」と臨済(号義玄、生年未詳一八六七)よろしく宣して「ただちに本論に入った若年の講師に驚きと反発を隠さなかつた学生たちも、講の進むことにその尋常ならざる気魄と識見を認めざるを得ず、踔厲風発として説示される「曾て我が武士に依

つて最も鮮かに表現せられた自律自由の高貴なる道德的精神」の諸相に啓発される者も少なくなかったという。野元為輝は、戦後次のように述べている。

結局海軍の教育、精神教育というものがね、軍人精神とか何とかやかましく言うくせにだね、そういうことを修養しようっていう人が一人もいなかったと、僕は断言するんだ。……これはね、自分のことを言っただけだけれども海軍軍人になるまで、俺は精神ゼロだったんだ、軍人精神は。航海学生の際に初めて安岡正篤の話聞いて、それで方向だけはわかったんだ、僕は。

それには得る所頗る多く、結局軍人精神の涵養は軍人勅諭を主体とする場合でも、視野を拡げて東洋思想の研究から更に進んでその体得に努力しなければならぬという結論となり、科学を重んずる海軍畑の中では少し変わった型の人間となつて進んだのである。

二 安岡正篤の「士学（武士道哲学新論）」

述録『士学論講』によれば、「士学（武士道哲学新論）」各回の講題は次の通り。

- 第一講 序論
- 第二講 鎌倉時代の精神的復活——特に聖道浄土二法門について——
- 第三講 禅の武士的精神
- 第四講 道元の禅風（一）
- 第五講 道元の禅風（二）
- 第六講 兵法論（一）——天宮本武蔵の生涯と其の剣道——
- 第七講 兵法論（二）——天宮本武蔵の生涯と其の剣道——
- 第八講 山鹿素行の士道論
- 第九講 副島侍講と中庸の哲学
- 第十講 結論

このうち、例えば、第六・七講は『東洋思想研究 第拾冊』（大一一・八二）所載の「二天宮本武蔵の剣道と心法」と、第八講は『東洋思想研究 第拾四冊』（大一一三・四二）所載の「山鹿素行の人格涵養論」と概ね同じ内容であり、安岡がその時々自身の研究をベースに毎回の講演に臨んでいたことが分かる。

各講において、安岡は、将来高級指揮官や参謀官ひいては軍政・軍令の中樞を担う存在となるべき学生たちに、親鸞（善信、一一七三—一二六三）、道元（希玄、一一〇〇—一二五三）、宮本武蔵（一五八四？—一六四五）、山鹿素行（高興、一六二二—一六八五）などの言行と思想を通じて、「人生を究尽して迷妄する所無き人格を確立する者」すなわち「士」としての在りようを説いた。中

学校時代に打ち込んだ剣・禅の素養をふまえ、博引傍証、東西の哲学や和漢の古典に基づく豊富な知識を交えて練り広げられるその語りは、大学の講義然とした従来の部外者講演とは異なる、独特の格調と説得力を備えていた。

安岡はいう。「武士道」とは「日本民族精神」に生きる者の「最も靈活なる発動」である。その理想は「決して空想であつてはならぬ」ず、「かくすればかくなるもの」と知りながら、止むに止まれぬ大和魂「吉田松陰（寅次郎、一八三〇—一八五九）歌」で「藹直に進まねばならぬ」と。

他力念仏の法門の本領は如何に。それは徹底した凡夫観罪業観に立つ努力が肝心ではないか。禅の本領は何処に在るか。それは懸崖より撒手して飛び下り、絶後に蘇る大覚悟が必要ではないか。武道に到つては今更此処に説く迄もない。武士の上箭うわやの「原文転写」かぶら一筋に思ふ心は神ぞ知るらむ「菊池武時（二九二?—一三三三）歌」である。最もやさしい恋でも、吾背子はものな思ひそことしあらば火にも水にもわれなくなくに「阿倍女郎（安倍とも、生没年未詳）歌、『萬葉集』巻第四・五〇六、といふ古歌の精神迄ゆかねば畢竟遊戯である」。

周知の通り阿倍女郎歌は後に菊池武時歌とともに『愛国百人一首』に選定（日本文学報国会、昭一七・二一・二〇発表）され、日本女性の普遍的美徳（婦徳）——「夫をして後顧の憂なからしめる

けなげさ」——を端的に表現した相聞の秀歌として膾炙するが、「大和魂」や「日本民族精神（日本精神）」という文脈に即して引かれた例は、おそらくこれが最初ではないだろうか。

ところで、武士道といえは「生死の問題」——「死生観」を抜きにしては語れないが、安岡もまた講を閉じるに当たり、「死の覚悟」について論じている。全講中の白眉にして、高等学校時代に味読した西田幾多郎（一八七〇—一九四五）の著作からの影響が如実にかがえる「永遠の今」論である。

すべて生きんとする意志はいふ迄もなく人生の原動力である。然しながらたゞ生きようとするだけではまだ動物的境界に過ぎない。人格に於て始めて如何に生きべきかの内面的要求を生ずる。茲に人へのみ許された至尊なる価値の世界——法則の世界——自由の世界があるのである。只生きようとする意志はやがて自己保存種族維持の努力となつて現れ、長生を願ひ、限り無き不死を望む。然るに一度「如何に生きべきか」の内面的要求に基いてくると、この自己を保存し種族を維持しようとする努力に新たな自覚を生ずる。前者は限りある時間——数量的時間を一分でも一時でも余計に偷まうとする執着であるが、後者は是の如き有限な計数的時間を超越して永遠の今 Eternal Now に安立しようとするものである。一方は官能的欲求の満足であるが、他方は至尊なる価値の体得——理想の実現である。……

武士の本領は平生に於ける死の覚悟に在ると思ふ。死を覚悟する時、猥雑な妄念はおのづから影を潜めて、人間の誠が現れる。……

かかる時こそ命の惜からめかねてなき身と思ひしらずば「田田道灌資長 一四三二—一四八六」臨終歌（下の句）、かねて亡き身と覚悟せぬから、いざといふ場合に狼狽する。それで真の価値観の成立しよう筈は無い。死の覚悟なくして真の生活は無いのである。……

死の覚悟を死に臨んでの自暴自棄と誤つてはならぬ。死に臨んで棄鉢になるのは肉欲の外無き俗心を証する。「原文改行」換言すれば「今」に即して「永遠」に参ずるのである。おろかなる者は永遠を解して一分一時の限りなく連るものと思ひ、時間を空間的に解釈して居る。……

真の永遠は今に在る。永遠は今の内展、involutionでなければならぬ。「原文改行」さういふ永遠は生滅流転の現象界に在つては到底解釈されない。現象を通ずる絶対の風光を尋ね、物を貫く人格の世界に入つて、始めて体認することが出来る。……

死の覚悟は永遠の今を愛する心である。永遠の今を愛することは絶対的価値を体現しようとする事である。そこに虚静より発する智慧が輝かねばならぬ。士が行蔵を慎むのも、死処を擇ぶのも、この智慧の作用である。楠木正成「二二九四？—一三三六」の戦死や大谷吉隆「吉継、一五六五？—

一六〇〇」の義戦や、近くは西郷南洲「隆盛、一八二八—一八七七」の最後などには、やはり深刻な智慧が働いて居ると思ふ。……

かくして現前の生死は永遠の光に照らされる時、忽然として妄執を散じ、たゞ真善美の欣求と為つて輝き、過去現在未来の断見も消えて、一念の今に無量寿、無量光を添へる。この自覚を体得して、始めて我々の肉体も神聖な存在となるのである。……

我々は一念の誠を忘れてはならぬ。そしてこの事は古来日本民族の胸琴を始終奏で、来た爽やかな天籟であつた。

よほど手ごたえを感じたものであろうか。後に安岡は大正一五（一九二六）年春頃に再び海軍に招聘され「文明の帰趨と日本精神」と題した講演を行つているが、冒頭「私は嘗て海軍大学校で士学に関する講論を久しきに亘つてお話ししたことがあります。たが其の時も今も変らぬ確信を皆様に対して持つて居ります。皆様は申すまでもなく、武人であります。私の所謂確信とは其の武人としての覚悟に就てあります」と述べ、「武士道を解する者」の「何時でも露の命に永遠の価値を具現しよう」と云ふ覚悟——「永遠の今に生きようとする真の民族精神」について改めて切論している。

『士学論議』の頒布されるやこれを熟読玩味したのであろう。部内きつての教育研究家で、海軍大学校選科学生（大八・二二・一

く大ニ・四・ことして東京帝国大学文学部教育学科で委託教育を受けた経歴を有する広瀬豊大佐(当時二等海防艦滿州艦長、一八八二—一九六〇)⁽³⁵⁾は、ほどなく、

武士道を以て封建時代の遺物として、現代に要なき廢物の如く考へるは間違であるばかりでなく、吾々軍人は其の武士道の継承者でなければならぬ。……現今の如く自然科学方能の兵学は、人間の価値を再低度にして動物と同一視し、尚ほ憐らずして人間を機械と同一視し、大は小に勝ち、寡は衆に負ける。勝敗は皆算盤の原理に還元してしまふ。斯の如くして遂に『逃げるが勝』の兵法は生れて来る。……教育第一主義——精神教育——武士道復興——文武兼備、之れ大詔奉体の唯一無二の方法である。軍隊教育研究の範圍は広く、軍隊教育に改善を要すべき点が甚だ多い。然し武士道復興論の如く重大なるものはない。⁽³⁶⁾

と論じ、更には安岡の向こうを張るかのように、「武士道を言ふ者は必らず孔子『丘、BC五五二?—四七九』の教育を知らなければならぬ。而して武士道は実に今日の軍隊教育の出発点でなければならぬ」として四書五經の教育的分析に取り組んでいる⁽³⁷⁾。

安岡の言説が関心を持たれた背景には、大正期に入つて徐々に衰えつつあつた武士道精神の復活という目的性もさることな

がら、この時期日本海軍が直面していた現実的問題性があつたと考えられる。大正一一(一九二二)年二月六日に調印された軍備制限条約(ワシントン海軍軍縮条約)によつて戦艦・巡洋戦艦等の主力艦保有比率が対米英六割に設定されたことは、国際協調を重んじ建艦競争による国家財政の破綻を回避するという意味で妥当な結果といえたが、一方で、将来の対米戦を想定するにおいて最低七割を保持した上での「漸減邀撃」——「艦隊決戦」を基本方針としていた海軍にとつては、兵力の劣勢をいよいよ切実に意識させる契機ともなつた。戦略・戦術研究では、日露戦争後に秋山真之中佐(のち中将、一八六八—一九一八)によつて合理的・数理的に確立された「優勝劣敗」の兵学——「彼ノ兵力ヲ知レハ之レニ優レル兵力ヲ以テ対スレハ百戦百勝セサル事ナシ」——に替わつて、その秋山兵学に「負フトコロ尠カラサル」としながらもあえて「寡ヲ以テ衆ニ勝ツト」を強調した佐藤鉄太郎中将(一八六六—一九四二)の「絶数兵学」⁽⁴¹⁾が重んじられるようになっていく。⁽⁴²⁾

佐藤「絶数兵学」——「数理的優劣ノ差ハ戦ノ勝敗ヲ左右スヘキ最大ノ力ナリト雖トモ数ノ優劣ハ決シテ勝敗ヲ決スヘキ唯一ノ要素ニアラス」——の要諦は、運動エネルギーの法則(≡ $E=mv^2$)に着想を得た $E=mv^2$ の公式——「凡ソ力ノ法則ハ万有ヲ通シテ変セス悉ク活動力ノ二乗ト其ノ質量ノ相乗積ニ等シキカ故ニ其ノ影響ノ物質ニ輕クシテ其ノ活動力ノ優劣ニ大ナルハ疑ヲ容レス而カモ活動力ハ攻撃ノ精神ヨリ生ス」——に

よつて端的に示される。これを用いれば、仮にこちら側の有形の軍備すなわち物量に換算される兵力Mが相手側の半分であったとしても、戦略・戦術の「妙用」、将帥の偉大な「人格」、指揮官の「決心」、旺盛なる「士気」と「攻撃精神」等々、無形の要素に基づく活動力Vを相手側の二倍發揮することが出来れば、総合的な武力Forceは結果として二倍になる。⁽⁴⁵⁾

「持たざる国」としての否応なき自覚においておのずから佐藤「絶数兵学」に依らざるを得なかつた大正期日本の海軍にとつて、安岡の武士道論はまさにこの公式を補完するもの、潜在的Vを引き出す「可能性の哲学」——例「彼〔宮本武蔵〕はまた『巖の身』といふことをやかましく言つて居る。……これは兵法鍛錬の極、身におのづから万理を得て無限の力を体得し、強大不動の姿に在るを意味する」——として見出されたのであつた。⁽⁴⁶⁾

三 その後の安岡正篤と海軍

海軍大学校での連続講演修了後も、安岡正篤は海軍当局からの依頼に応じ、判明しているだけでも以下の講演を行っている。巷間「海軍の安岡、陸軍の大川〔周明、一八八六—一九五七〕と並び称されたゆえんである。

- (1) 「文明の帰趨と日本精神」(於海軍大学校?⁽⁴⁸⁾、大正五春頃)。同題述録(大正五三印刷)あり。
- (2) 「幕末と武士道」(於海軍某学校、大正五春頃)。同題述録(大

正五三印刷)あり。

(3) 「人格ノ修養ト鑑識」(於海軍水雷学校、昭二・三・二八—二九。⁽⁵⁰⁾述録不明。

(4) 「現代ノ世相ト軍人哲学」(於海軍兵学校、昭三・?)。同題述録(昭三・?印刷)あり。

(5) 「礼と日本精神」(於霞ヶ浦海軍航空隊、昭五・二・二五)。同題述録は『思想研究資料第三十七号』(海軍省教育局、昭五・四印刷)として刊行・部内有償頒布。

(6) 「東西洋思想の特質」(於海軍教育局思想講習、昭五夏頃、兩日講演。同題述録は『思想研究資料第四十四号』(海軍省教育局、昭五・九印刷)として刊行・部内有償頒布。

(7) 「重職心得箇条解説」(於海軍大学校、昭一八・八・二三)。同題述録は『海軍大学校講究録 海大講第十号』(昭一九・二・二〇印刷)として刊行・部内有償頒布。主な聴講者は海大最後の卒業生となる甲種三九期(昭一八・七・一—昭一九・三・四、繰り上げ卒業)で、吉岡忠一少佐(のち中佐、第一航空艦隊参謀等、一九〇八—二〇〇〇)、千早正隆少佐(のち中佐、連合艦隊参謀等、一九一〇—二〇〇五)、関野英夫少佐(のち中佐、連合艦隊参謀等、一九一〇—一九九四)などがいた。

(6)―(7)の間、一〇年以上経過しているが、これはおそらく、昭和七(一九三二)年二―三月に発生した井上日召(本名昭、一八八六—一九六七)らの血盟団事件とそれに連動した現役海軍士官数

名を中心とする五・二五事件において、両事件の被告人およびその関係者たちが過去に安岡と「相往来」していた事実を双方⁽⁵¹⁾慮^{ちもんばか}った結果、自然間隔が空いたものであろう。

講演以外にも安岡は、海軍省大臣官房調査課長の高木惣吉大佐（のち少将、一八九三—一九七九）が昭和一五（一九四〇）年八月より組織し始めたブレイン・トラスト集団の一人に選ばれ、同課の「直接連絡の嘱託」として翌年一二月八日の開戦を迎えている⁽⁵²⁾。

個人的な交流も大正後期〜昭和初期には活発に行われた。安岡が学監を務める金雞学院（昭二・一設立）には前出堀内三郎やその後任の海大校長であった山本英輔中将（のち大将、一八七六一—一九六二）、原敢二郎中将（一八八〇—一九四八）、有馬良橘^{りょうきつ}後備役海軍大将（一八六一—一九四四）などが講演に招かれており、前出広瀬豊も学院を介して安岡とやり取りがあったらしい⁽⁵³⁾。

昭和二（一九二七）年一〇月三〇日に横浜港外で実施された海軍大演習観艦式では、戦艦扶桑艦長の市村久雄大佐（のち中将、一八八三—一九六二）より招待され、後に軍民合同の急進的国家革新運動（改造運動）における海軍側の主導者となる藤井^{ふじい}齊少尉（戦死後少佐、一九〇四—一九三三）の案内で艦内をつぶさに見学している⁽⁵⁴⁾。

そうした好誼の一方で、安岡は当今の海軍軍人一般のたゞすまいには失望を感じるところもあつたらしく、時に「海軍も今日の様な教育ぶりでは、さなくとも時世がこんな機械的荒涼を

極めてゐるのであるから、もはや將軍「八代六郎」の様な流風余韻^{りゆうふうよゐん}ある武人を作り出すことは出来ないのではないかと恨まれる⁽⁵⁵⁾」と辛辣な批評を加えている。

前出山本五十六とは海大出講時に面識を得ていたが、昭和九（一九三四）年に、山本の郷里長岡の知友・反町栄一（一八八八—一九七三）を通じて、同地の社会事業家・野本恭八郎（号互尊、一八五二—一九三六）の発意による財団法人日本互尊社の創立^{ことせん}（二・二九）に助力したことで親交が深まり、以来「面談に、文書に、相当繁しく国際情勢について率直な意見の交換」が為されたという⁽⁵⁶⁾。山本が南方ブーゲンビル島上空で戦死（昭一八・四・一八）する約三ヶ月前には、安岡は、鈴木貫太郎退役海軍大将（のち首相、一八六八—一九四八）⁽⁵⁷⁾、米内光政予備役海軍大将（元首相・海相、一八八〇—一九四八）、及川古志郎^{ふるしろう}大将（元海相、一八八三—一九五八）など錚々たる面々と肩を並べて山本慰問の清談会（於趙町星ヶ丘茶寮、昭一八・一七）に参加し、席上もものされた激励の寄せ書きを代表で戦地に送付して喜ばれている⁽⁵⁸⁾。その後幾許もなく悲報に接した安岡は、「元帥の偉業乾坤を動かす 風神おのづから蒼龍窟^{そうりゅうくわ}「河井継之助^{つぎのすけ}」（田長岡藩家老上席、軍事総督等、一八二七—一八六八）雅号」に比す……」等と関係誌上で追悼の意を表する一方で、

河井や山本のやうに傑出した至誠の人物が沢山あれば結構だが、それがないので困ると、必ずや多くの人人^{びんびん}がいふで

あらう。しかしいつの世も人がないより、人を知らないの
である。国家危急の今日、自ら誠意をもつて推輓すべき人
材を胸中に貯へてをらぬやうな人間は国士たり公人たる資
格はない。さうして少しは乱世相応に型を破つた清新な人
事を決行して見てはどうか。いつまでも古着屋あさりをせ
ねばならぬほど「貧傑」してゐる日本ではないと信ずる。⁽⁶⁰⁾

と、意味ありげな箴言を綴っている。⁽⁶¹⁾

なお、戦後も安岡と旧海軍関係者との接点は消えることなく、
特に前出富岡定俊とは時事に関する各種会合を通じて親しく往
来したという。

四 昭和海軍と武士道

昭和期の海軍では、士官教育に武士道論あるいはそれに関連
した古兵法論や剣・禅等の修養論が盛んに取り入れられた。参
考までに概観しておこう。

海軍大学校では、大正一五（一九二六）年四月一日付で教官兼
軍令部出仕に補された寺本武治大佐（のち少将、一八八四—一九五八）
が、甲種学生の正科目「統帥」を長期にわたつて講義する。⁽⁶²⁾ 本
邦最古の兵法書とされる『鬪戦経』（大江匡房（一〇四一—一一二二）
編）等をテキストとした異色の講義——「統帥とは何か、会
社の社長が社員を使用するのも統帥である。デパートの支配人
が売子を監理するのも統帥である。奥さんが女中を使うのもま

た統帥である。しかし、諸君のやらなければならぬ統帥は、
砲煙弾雨の中の統帥である。即ち、死生の境に於ける統帥であ
る」——は時として「天皇の属性、更に進んで国祖天照大神の
属性」にまで究理を及ぼし、学校当局では毎期賛否両論を呼ん
だという。⁽⁶³⁾

横須賀鎮守府附を最後に昭和二（一九二七）年一二月二四日付
で予備役編入となつた前出広瀬豊は、同年中に武士道研究会を
立ち上げ、『軍人小訓』（昭二二二）、『軍人道德論』（昭三五）、『軍
紀の研究』（昭三・二二）等の著作を次々と刊行、更には「軍人精
神は即武士道也」との確信のもと山鹿素行やその兵学門流に連
なる吉田松陰の事蹟と思想に関する研究・啓蒙活動を部内外で
精力的に展開する。なかでも『吉田松陰の研究 正・統』（武蔵
野書院、昭五・二一（正）、昭七・一（統））はベストセラーとなり、正

篇は昭和六年度文部省推薦図書にも選定された。⁽⁶⁴⁾
海軍兵学校では、昭和三（一九二八）年から翌々年にかけて一
号生徒（第五七〜五八期）に「統率学」と「軍隊教育学」を講義
した広瀬の影響もあつてか武士道の訓育的重要性が改めて認識
され、昭和七（一九三二）年四月には校長松下元少将（のち中将、
一八八四—一九五三）が素行の「武教小学」（『武教全書』所収）と「士
道」（『山鹿語類 卷第二十一』所収）それに松陰の「士規七則」を一
冊にまとめ生徒に配布、自習時間等に熟読玩味させるとともに、
みずから「軍人トシテ涵養セザルベカラザル武士道ヲ修得セシ
メン」と要点を講述している。⁽⁶⁵⁾

海軍省教育局では、昭和四（一九二九）年から「概ね准士官以上を目標とし其の研鑽及部下思想善導に資せむ為」の冊子として『思想研究資料』の定期刊行・部内有償頒布を開始する。同シリーズは昭和初期の海軍部内における思想的関心の動向を知る上で必須の文献資料であり、安岡正篤の講演述録二篇（前述）も含まれるが、とりわけ異彩を放っていたのは「思想研究資料第五十一号 啐啄の機と殺活自在の妙」（昭六・一印刷）である。これは京都東福寺開山堂の禅僧・勝平大喜（号悅巖、のち臨濟宗国泰寺派（富山）管長、一八八七—一九四四）の講演（於具鎮守府、昭五・五・？）述録であり、そこに説かれた「人境俱奪の境」すなわち「真空」——「貴方々の戦争の真ツ唯中は之だらうと思ひます。敵なく我れなく恐るゝことなく悲むことなく一切のものが尽きて了つて、唯剣を振つて以て進み唯打つと云ふ、其の打つと云ふ事は私とか境とか云ふものを利用して居るのではなく唯不可思議な尚不可解な唯説明の出来ない偉大な働きが出て来て、さうして私共はそれで無心に働いて居るのだらうと存するのであります」——の教えにはたと得心する者もいたことであらう。

太平洋戦争／大東亜戦争期には、平時における研究・鍛錬の成果を現実の戦略・戦術にそのまま応用した、あるいは意識するせざるとに関わらず戦場において武士道的なふるまいをみせた海軍軍人も現れた。象徴的な一例を挙げて本稿の結びとした。

開戦当日（昭一六・二・二八、現地時間一二七）早朝、海軍第一航空艦隊（空母機動部隊）は艦載機による奇襲攻撃を行い、ハワイ・オアフ島真珠湾に停泊していた米海軍太平洋艦隊の空母を除く主要艦艇および陸上基地に駐機していた航空機の大部分をほぼ一方的に撃破するという世界海戦史上未曾有の戦果（戦艦・撃沈四・大破二・中破三、航空機・撃破一八八、等々）を挙げた。作戦遂行に当たり、水雷畑出身でなおかつ実戦での空母の集中運用に前例のないことから「エライことを引き受けてしまった」と心配を隠さなかった司令長官の南雲忠一中将（没後大將、一八八七—一九四四）を航空参謀（甲）の源田実中佐（のち大佐、一九〇四—一九八九）とともに直近で補佐・意見具申する立場にあった参謀長の草鹿龍之介少将（のち中将、一八九二—一九七二）は、次のように心胆を練って臨んだという。

私自身としては、このような大作戦に南雲長官を補佐して、その計画指導の責任者となることは、もちろん初めてのことであるから、なにか心の拠りどころがほしかったのである。……いろいろ考えた末、フト心に浮んだのは、子供の時から習い覚えた「二刀正伝」無刀流剣道の型に五典というのがあり、そのなかに、金翅鳥王剣というのがある。金翅鳥の羽翅を天空一面に拡げたような心で、太刀を上段に取って敵を追い詰め、ただ一撃に打ち落とし、そのまま元の上段に返るのであるが、その理の詮索は別として、この一

手こそと思ひ込んだのである。

じっさいに草鹿は、攻撃隊収容後は再出撃を行わず、結果的に残存艦艇や船渠、後方の工廠、油槽などの陸上諸施設を余すところなく破壊せぬまま艦隊を帰投させた。そのため、敵に早期戦力立て直しの余地を残したとして、後々まで批判されることになる。草鹿の反論を聞こう。

この作戦の目的は南方部隊の腹背擁護にある。機動部隊の立ちむかうべき敵はまだ一、二に止まらないのである。だからこそ、ただ一太刀と定め、周密な計画のもとに手練の一太刀を加えたのである。大体その目的を達した以上、いつまでもこゝに心を残さず獲物にとられず。いわゆる妙応無方^{おもうひほうせんせき}朕跡^{みまご}を留めず「臨濟録」一序、であると直ちに引き揚げを決意した。……なぜ大巡以下の残敵を殲滅しなかったかとか、工廠、重油槽を壊滅しなかったのかとか、戦力の主力である空母を徹底的に探し求めて壊滅していたら東京空襲はなかったとか、いろいろ専門的批判もあるが、私にいわせれば、この際、これらは何れも下司の戦法である。「原文改行」私はこの時、何の躊躇もなく南雲長官に意見をいつて引き揚げに取りかかった。

海軍大学校甲種学生（第二四期、大二三・二二一〜大二五・二二二）

を了えて以降、主として航空畑でキャリアを積んで来た草鹿にとって、真珠湾攻撃は多年練磨した兵法の精華を發揮する最初の大舞台であった。だからこそ、見事相手を「手練の一太刀」で打ち倒した後は、その至高の瞬間を汚さぬ（永遠ならしめる）ためにも、前後際断「思いを残さず風のごとく去る」ことが、武人として、軍人として、最も理にかなっていたのである。あたかも安岡正篤の説いた、巖流島の決闘における武蔵——「この時彼が小次郎（佐々木、生年未詳一六二二）の止めを刺さなかつたことを後に為つて色々取沙汰するものもあつたが、武蔵は云つた。止めを刺すと云ふことは怨敵の所作である。我と彼とは唯兵法を較べただけであるから、勝つて後まで止めを刺す理由は無いと」——のように。それゆえに、復路連合艦隊司令部より状況の許す限りただちにミッドウェー島空襲に赴くようにとの電令を受けた草鹿は「相手の横綱を破つた関取に、帰りにちよつと大根を買つて来いというようなものだ」と非常な憤懣を抱いたのであつた。

一方で草鹿は、今回の作戦は「畢竟据え物切りでしかない」と物足りなさも感じており、速やかに内地に戻つて「毀れた刀の寝刃を合わ」せ、いずれ「堂々」と敵空母群を相手に「洋上晴の舞台で渡り合いたい」と「着意」していた。当時連合艦隊参謀長であつた宇垣纏少将の日記（昭一七六・五）によれば、四月下旬に行われた第一期作戦研究会において、草鹿はハワイおよびインド洋方面での戦訓に鑑み「海上航空部隊の攻撃は充分

なる調査と精密なる計画の下に切り卸す⁽¹⁷⁾一刀の下に凡てを集中すべきなり」と「一刀流的名言を高調」し、宇垣らGF司令部隊は内心これに「相当の不安を感じた」という。⁽⁸⁶⁾

かくて日本海軍は、こののち珊瑚海海戦での部分的戦捷（昭一七・五七・八）を経て、戦争そのものの転機となるミッドウエー作戦に臨むことになる。⁽⁸⁷⁾

注

(1) 安岡の経歴・事績に関して、概要は、『安岡正篤とその弟子』（竹井出版、昭五九・六）、『安岡正篤先生流芳録』（上下分冊、全国師友協会残務委員会、昭五九・一二）、林繁之『安岡正篤先生随行録』（竹井出版、昭六二・六）、『安岡正篤先生年譜』（財団法人郷学研修所・安岡正篤記念館、平九・二）、亀井俊郎『金雞学院の風景』（邑心文庫、平一五・五）等を参照。近代日本思想史上における同人の存在の大きさについては、ここで詳細に論じる暇はないが、史実として、終戦の「詔書」草案作成に際し漢学者の川田瑞穂（一八七九—一九五一）らとともに「用語表現体裁」の刪修に携わった（昭二〇・八・一四）ことは特記しておきたい。「機関銃の音に目を覚す 歴史的なる玉音放送の経過」（陸軍馬北司令部複写、昭二一・八・一四）、『昭和二十一年起 訓令訓示綴 馬令兵站病院』＝JACAR（国立公文書館アジア歴史資料センター <https://www.jacar.go.jp>）RefC1411079700 第一画像。なお本稿では引用文献の注記に当たり、二次引用の場合は

右のように記号Ⅱを以て示した。

(2) 戦後一度復刻（関西師友協会、平三・七）された他、書籍に改版・改題されたものが『ますらをの道——武蔵・道元・山鹿素行』（仮名遣い等改変、ディ・シー・エス出版局、平一五・八）および『いかに人物を練るか——士学論講』（前同、致知出版社、平二九・五）として刊行されており、現在でも容易に閲覧出来る。

(3) 広瀬彦太編『山本元帥 前線よりの書簡集』（東光書院、昭一八・一〇）二〇九頁。野元為輝「太平洋戦争の反省録」（昭五七・二〇）Ⅱ戸高一成編『証言録「海軍反省会」（P.H.P.研究所、平二一・八）四八二頁。安岡の海軍大学校出講に関しては、谷光太郎「安岡正篤と海軍（1）〜（3）」、『水交 五五〇／五五二／五五三』（平一三・六／同・九／同・一〇）、Brown, Roger H. "Yasuka Masahiro's New Discourse on Bushidō Philosophy": Cultivating Samurai Spirit and Men of Character for Imperial Japan." *Social Science Japan Journal*, Vol.16 (1), winter 2013, pp. 107-129. 等に言及があるが、詳細な分析はされていない。

(4) 本稿に登場する海軍軍人の階級・所属・役職等については、『官報』、『海軍辞令公報』、各年の「現役海軍士官名簿」（海軍省）および『海軍義済会員名簿』（財団法人海軍義済会）等で確認の上記載した。なお階級は、海軍軍人の場合「海軍〜」と表記するのが正式であるが、本稿では省略した（例：「堀内三郎海軍中将」↓「堀内三郎中将」）。ただし予・後備役等はこの限りでない。

(5) 安岡正篤『聖賢遺書新釈叢刊第十八 故八代六郎講説安岡正

篤抄録 将の哲学』（金雞学院、昭七・一二）＝『師友 五〇』（昭二八・一二）五頁。同「王陽明の人と学」（王陽明生誕五百年記念大会講演、於大阪毎日会館、昭四六・九・一八）＝『現代活字講話選集 4 王陽明』（安岡正篤先生生誕百年記念事業委員会、平九・一二）一〇～一三頁。

(6) 安岡正篤『東洋思想研究』続刊について、『東洋思想研究 第拾壹冊』（大二三・一）一頁。同『日本精神の研究』（玄黄社、大二三・三）「緒言」一頁。

(7) 安岡正篤『新時代を創造すべき東洋人の自覚』、『東洋思想研究 第壹冊』（大一一・一一）＝『東洋の心——安岡正篤、若き日のエッセイ・評論』（収録時に「東洋文化に対する自覚——新時代の創造」と改題、黎明書房、昭六二・三）一五頁。

(8) 安岡正篤『追憶余情』、史料調査会編『太平洋戦争と富岡定俊』（軍事研究社、昭四六・一二）四六八頁。

(9) 大正一三（一九二四）年九月から「一年有半」…寒泉会編「安岡先生著述年表」、前掲「安岡正篤とその弟子」二九一頁。同年一月から「一年有半」…前掲「安岡正篤先生流芳録 下巻」二二二頁。同年四月受嘱…林前掲「安岡正篤先生随行録」五二～五四、七〇頁。同年四月頃から「一年有半」…前掲「安岡正篤先生年譜」二八頁。なお筆者もかつてこれらに拠って、文章中に「講師として「安岡が」招聘されたのは一九二四（大正一三）年」と記述したことがある。本稿を以て訂正に代えたい。木下宏一「日本海軍の短期決戦主義に関する一考察——安岡正篤と

『永遠の今』、『時間学研究 第七卷』（平二六・一二）三三三頁。

(10) 外務省情報部第二課長の芦田均（一八八七—一九五九）による全一〇回の科外講演「最近国際政治」（大一四・三・一七開講）は、毎週火曜日午後、一回二時間（一四・三〇～一六・三〇）で実施されている。安岡の「土学」も曜日以外は同様の形式で行われたとみるべきであるが、五月以前に始まり、後述のように九月中に終了予定であったことから、途中で何度か休講したと考えられる。「5 芦田書記官 海軍大学校」、『外務省記録 自大正十四年一月至同年十二月 情報部関係講演関係雑纂 別冊 本省職員之部三』=JACAR RefB03040794700 第二～四画像。

(11) 「大正十二年八月十八日 海軍大学校」、『海軍公報 第三千二百五十五号』（大一二・八・一八）八一五頁。なお引用文中の漢字について、今日一般的でないと思われる字体・読みには適宜ルビを付した（以下同）。

(12) 「大校第四三号 大正十二年十月十六日 海軍大学校」、『海軍公報 第三千二百九十七号』（大一二・一〇・一八）一〇〇九頁。

(13) 第八講の冒頭で安岡は「従前の諸講に於て、私は士とは如何なる者をさして謂ふか——士道の眼目は何処に在るか等の根本問題を論じて来た」と述べ、改めて「士」の定義について論じている。『海軍大学校講究録附録 安岡正篤講演 土学論講』（大一一・五・七頃印刷）一〇七頁。

(14) 「大校第一三三三号 大正十三年三月十九日 海軍大学校」、『海軍公報 第三千四百十七号』（大二三・三・二〇）三〇一頁。

- (15) 私学では、東洋協会大学（のち拓殖大学）学長の後藤新平（元外相・内相等、一八五七—一九二九）、同大幹事の永田秀次郎（東京市長、一八七六—一九四三）らの招聘を受け、大正三（一九一四）年四月より講師として本科選択科目の「東洋民族心理研究」を担当（昭九・三退職）。『拓殖大学一覽 昭和十六年十月』（昭一六・一〇）一三二頁。拓殖大学百年史編纂委員会編・発行『拓殖大学百年史 大正編』（平二二・七）一二二—一二四頁。
- (16) 『海軍少佐又ハ大尉ニシテ……枢要職員又ハ高級指揮官ノ素養ニ必要ナル高等ノ兵学其ノ他ノ學術ヲ修習セシムル』べく『詮衡』（海軍大学校令〈大七・八・二四公布〉第十四条）されたエリート（概ね現在の海上自衛隊幹部学校指揮幕僚課程〈CS〉学生に相当）で、絶対条件ではなかったが、甲種卒は将官への登竜門とされた。『官報 第千八百十一号』（大七・八・一五）三一、三二二頁。実松謙『海軍大学教育——戦略・戦術道場の功罪』（光人社、昭五〇・一一）七一、七二頁。高橋秀典『昭和期海軍大学校の特質』（『史叢 第五十二号』平六・三）三一、三二頁。近代史編纂会編『海軍艦隊勤務』（新人物往來社、平一三・七）一〇五—一〇七頁。
- (17) 前掲『士学論講』一頁。
- (18) そうした「年齢的にも三十歳前後の、相当にヒネた学生」たちのうち前出和住徳太郎ら四、五名の者は、一夕安岡を新橋の料亭に招待し、次々盃を勧めて酔い潰そうとしたが、斗酒なお辞せずしてしかも泰然たる同人の酒豪ぶりにかえって自分たちが
- 無様を晒す有様であったという。前掲「安岡先生著述年表」二九一頁。林前掲『安岡正篤先生随行録』五五、五六頁。前掲『海軍艦隊勤務』一〇六頁。
- (19) 前掲『士学論講』一頁。
- (20) 前掲『証言録』海軍反省会（野元証言）一七七頁。
- (21) 野元前掲『太平洋戦争の反省録』四八一頁。
- (22) 目次では「第一〇講 士学大観」となっている。
- (23) 「士学」終了と同月、安岡は玄黄社より三つ目の単著にしてロングセラーとなる『日本精神の研究』（昭一二・五増補改版発行、昭一六・二二九版発行）を刊行している。字句や構成に細かい異同はあるものの、こちらも『士学論講』と大部分重複する。
- (24) 前掲『士学論講』三頁。
- (25) 四条畷中剣術教師（囑託）で山岡鉄舟（一八三六—一八八八）の一刀正伝無刀流に連なる細川清三郎（一八五五—一九二二）に剣を、同校音楽教師の島長代（生没年未詳）に禪を、それぞれ親しく導かれたという。四年次には大阪府下の剣道大会に主将として参加、団体優勝を飾っている。安岡前掲「新時代を創造すべき東洋人の自覚」一三、一四頁。安岡正篤「剣道の人格主義」、『東洋思想研究 第四冊』（大一一・二）三頁。同『漢詩読本』（日本評論社、昭一一・二二）「序」一頁。林前掲『安岡正篤先生随行録』二九—三一、三七頁。勝山町史編纂委員会編・発行『勝山町史 下巻』（平一八・三）六五〇、六五一頁。
- (26) 例えば『文学博士姉崎正治演』士氣と修養とに関する哲学的

観察(大正二六印刷)、『文学博士服部宇之吉講演 支那国民性及国民思想(講究録附録)』(大七・一一印刷)等と比較参照。

(27) 前掲『士学論講』一七頁。

(28) 前掲『士学論講』一〇七、一〇八頁、「」内引用者注(以下引用文同)。

(29) 前掲『士学論講』一〇八頁。

(30) 関西連合教育会・坂口利夫『愛国百人一首通釈』(五車書房、昭一八・二)六頁。

(31) そもそも、日本思想史上に「日本精神」という語が登場したのは「大正十二、三年の頃」からで、社会教育家の小尾晴敏(二八八三—一九三五)の主宰する社会教育研究所(在旧本丸跡大一〇・三・一〇設立)の関係者が「談話或は講演等の機会に屢々用ゐ」たのが嚆矢とされる。同所の事業には、安岡も乞われて参加(大一二・四)していた。文部省思想局編・発行『思想調査資料特輯 日本精神論の調査』(昭一〇・二)一、二頁。刈田徹『大川周明と国家改造運動』(人間の科学社、平二三・二)二〇六—二二一、二二八—二三〇、二三〇—二三三頁。

(32) 例えば以下の言説。「宗教的要求は自己に対する要求である、自己の生命に就いての要求である。我々の自己がその相対的にして有限なることを覚知すると共に、絶対無限の力に合一して之に由りて永遠の眞生命を得んと欲するの要求である。……」。西田『善の研究』(弘道館、明四四・二)二一九頁。安岡前掲『新時代を創造すべき東洋人の自覚』一六頁。亀井前掲『金雞学院

の風景』六七頁。

(33) 前掲『士学論講』一三四—一三六、一三八—一四一頁。

(34) 『安岡正篤先生口述 文明の帰趨と日本精神』(大一一・三印刷)一、一二、一三頁。

(35) 教育畑でのキャリアは、海軍水雷学校教官兼副官(大一一・二—大二・二二二)、海軍兵学校教官兼幹事(大五・八—大六・六・一)、呉海兵団副長兼教官(大一一・二—一二・二—一二・二二二)など。高野邦夫編『近代日本軍隊教育史料集成解説』(柏書房、平一六・五)六〇、六一頁。戸高一成編『証言録』海軍反省会II(佐藤毅元大佐(一九〇一—一九九〇)証言、PH P研究所、平三〇・八)三七二頁。

(36) 広瀬豊『武士道復興論』、『有終 第百三十二号』(大一一・二)二四、二五、三五頁。同論中には当然『士学論講』も引用されている(二五頁)。

(37) 広瀬豊『武人教育より見たる孔子の教育』、『有終 第百三十七号』(大一一・四)一頁。同論文は翌々月号まで連載。

(38) 要因として、いわゆる大正教養主義・デモクラシーの思潮に伴う「自由教育」の軍隊教育への浸透や、かつてじつさに。武士であり明治期の海軍を牽引した東郷平八郎元帥海軍大将(終身現役、一八四八—一九三四)、山本権兵衛大将(大三・五—一予備役編入、一八五二—一九三三)ら重鎮たちの老齢化、第一線からの引退などがあつたと考えられる。「連合艦隊の功罪」(大井篤元大佐(一九〇二—一九九四)証言)、『語りつぐ昭和史

——激動の半世紀 4(朝日新聞社、昭五・二二) 一一五頁。

西方真太郎「金雞学院創立前後——園遊会のことども」、前掲『安岡正篤先生流芳録 上巻』四〇一頁。前掲『証言録』海軍反省会(三代)就元大佐(一九〇二—一九九四)証言 一九六頁。

(39) 野村実「対米英開戦と海軍の対米七割思想」、『軍事史学 第三四号』(昭四八・九) 二六—三〇頁。同「海軍大学校は何を教えたのか」、堺屋太一他編『連合艦隊の蹉跌——今、改めて問われる日本型組織の限界』(プレジデント社、昭六二・七) 八四—八七頁。黒野耐「昭和初期海軍における国防思想の対立と混迷——国防方針の第二次改定と第三次改定の間」、『軍事史学 第一三三号』(平一〇・六) 一〇、一一頁。黒川雄三「近代日本の軍事戦略概史」(芙蓉書房出版、平一五・一一) 一三六—一三九頁。

(40) 秋山真之『海軍基本戦術 第二編』(明三九・二印刷) 〓『海軍基本戦術』(中央公論新社、令二・八) 一六一頁。

(41) 佐藤鉄太郎『海軍戦理学 完』(水交社、大二・七) 〓戦略研究学会編『戦略論体系』佐藤鉄太郎(芙蓉書房出版、平一八・一一) 一四八頁。同『海軍大学校講究録附録第三号 海戦要義』(大九・九印刷、大二・二再刷) 二七、一七〇頁。

(42) 高橋弘道「忘れられた海戦要務令戦務篇」、『軍事史学 第一四〇号』(平二・三) 七—一六頁。前掲『証言録』海軍反省会(野元為輝証言) 三〇六頁。前掲『証言録』海軍反省会4(前同) 四八頁。岩村研太郎「日本海軍における改革の継続性の阻害要因——現代の軍事組織に与えるインプリケーション」、『海

幹校戦略研究 第八卷第二号』(平三二・二) 二二、二四頁。

(43) 佐藤前掲『海戦要義』一三三頁。

(44) 佐藤前掲『海軍戦理学 完』一四五、一四六頁。同前掲『海戦要義』二四頁。

(45) 佐藤前掲『海軍戦理学 完』一四七、一五一—一五三、一五九—一六一頁。同前掲『海戦要義』二四—二七頁。前掲『連合艦隊の功罪』一一八頁。もとより「彼私の正確な比較は平時ではほとんど不可能」であり、数学に長じた士官のなかには、むしろ「 π の方が正しい」と主張する者もいたという。千早正隆「日本海軍の戦略発想——敗戦直後の痛痕の反省」(プレジデント社、昭五七・二二) 九七頁。

(46) 前掲『士学論講』一〇四、一〇五頁。佐藤「絶数兵学」との相性という点からいえば、大正二二(一九三三)年前半、安岡の「士学」開講前後に実施されたと思われる棋士・木村義雄五段(のち十四世名人、一九〇五—一九八六)の「角落将棋」をテーマとした講演——「実力がなければ、せっかくの駒組もなんの役にもたたない。いかに優勢な艦隊を海に浮かべてみたところで、実力のない者が、堂々たる駒組をしたようなものである。角落将棋は、それだけの実力差の者が指せば対等の勝負であるが、二枚も三枚も実力がちがう相手ならば、角落をもって容易に勝ちうるわけである。問題は、いかにしてその実力を養うかにある……将棋にかける実力とは。伎倆と体力と精神力とを総合したものである」——も好評であったという。実松前掲『海軍大

学教育」八一、八二頁。

(47)「座談会 安岡先生のお人柄と酒席でのお話」(下田実花(本

名レツ、俳人、一九〇七—一九八四)証言、前掲『安岡正篤と

その弟子』二四八頁。林前掲『安岡正篤先生随行録』五五頁。

(48) 述録には実施場所の記載がなく、本文冒頭に「私は嘗て海軍
大学校で士学に関する講論を久しきに亘つてお話したことがあ
りました……」とあるのみである。

(49) 述録にはやはり実施場所の記載がないが、後に安岡は同述録
を『金雞文叢 第十八』(金雞学院、昭七・四)に転載した際、「は
しがき」に「嘗て海軍の学校に於て切論したことがあります」
と述べている。

(50) 当時少尉で同校普通科学生であった高松宮宜仁親王(一九〇五
—一九八七)の日記(昭二・三・二九)より、『高松宮日記 第一
巻』(中央公論社、平八・三)二五七頁。同年に安岡は『人物の
修養と鑑識』なる冊子(『大東文化 第四巻第十号』附録、昭二・
九)をものしているので、正確には「人格ノ……」でなく「人
物ノ……」であったかもしれない。

(51)「五・一五事件を中心とした最近の思想動向に就て——金雞学
院学監安岡正篤氏に訊く」、『講演 第四十八号』八月下旬号(昭
八・八・二五)三二、四〇頁。

(52) 高木惣吉『太平洋戦争と陸海軍の抗争』(経済往来社、昭四二・
八)一九六—二〇〇頁。同『自伝的日本海軍始末記』(光人社、
昭四六・八)一九一—一九四頁。中山定義『海軍士官の回想

——開戦前夜から終戦まで』(毎日新聞社、昭六一・九)一五七
—一五九頁。

(53) 亀井前掲『金雞学院の風景』六三、六五、六六頁。

(54) 西方前掲『金雞学院創立前後』四〇一頁。

(55) 安岡前掲『将の哲学』五頁。

(56)「財団法人日本互尊社創立顛末」(昭一〇・二)、高楠順次郎『仏
教に現はれたる互尊独尊』(日本互尊社、昭九・一二)附録。前
掲『山本元帥 前線よりの書簡集』二〇九、二一〇頁。

(57) かつて鈴木は、海軍兵学校の校長在任中(大七・一二・二—大九・
一二・二)に生徒の歴史知識の欠乏を憂えて、同校教官(海軍教
授)で国文学者の立花親民(生没年未詳)に「歴史から武士道
発達の調査をして貰つて生徒に話して貰ふ様に依頼」したとい
う。鈴木一編『鈴木貴太郎自伝』(桜菊会出版部、昭二四・一〇)
二二二頁。

(58) 山本『昭和十八年一月二十六日 安岡正篤宛書簡』前掲『山
本元帥 前線よりの書簡集』二二二頁。

(59) 安岡正篤『弔山本元帥』、『東洋思想研究 第四十六号』(昭
一八・七)一頁。

(60) 安岡正篤『山本元帥と河井継之助』、『素行 第六十八号』(昭
一八・七)『経世瑣言 全』(収録時に「時局鎮定原理——山本
元帥と河井継之助」と改題、旺文社、昭一九・六)一九七、一九八頁。
(61) これに先立つこと数ヶ月、安岡は、知友・中野正剛(一八八六
—一九四八)の論説「戦時宰相論」(朝日新聞 昭和十八年一

月一日」(二面)を受けて「山鹿流政治論——威・愛・清・簡・教の『五治』」(読売新聞 昭和十八年一月十日「二面」)を発表し為政者に「修養」を促したことから、時の首相・東條英機(二八八四—一九四八)の不興——一時は中野同様行政処分も検討——を蒙っていた。前掲「座談会 安岡先生のお人柄と酒席でのお話」(小島直記(作家、一九一九—二〇〇八)証言)二四九頁。林前掲「安岡正篤先生随行録」八一、八二頁。

(62) 安岡前掲「追憶余情」四六八頁。大井篤「富岡定俊——対英米戦略を立てた軍令部作戦課長」、『日本海軍の名将と名参謀』(新人物往来社、昭六一・八)二七三頁。

(63) 異動による中断期間(艦艇、鎮守府等勤務を経て予備役編入、昭四・一一・三〇〜昭八・一一・一五)を除き、最終期の甲三九期まで担当(予備役編入以降は囑託として)。実松前掲「海軍大学教育」一二四〜一二七、二六八頁。高橋前掲「昭和期海軍大学校の特質」三六、四六頁。

(64) 中途から、みずから編纂した『闘戦経 全』(昭六・八印刷)を用いた。大江匡房については安岡正篤も、「達識の士」あるいは「彼我国史編纂上に忘るゝことの出来ない」等と幾度か言及している。前掲『士学論講』九頁。安岡正篤「国史より観たる我国の現状」(講演述録、於西神田警察署、月日不明)、『日本警察新聞 第六百十三号』(大二三・八・一〇)三面。

(65) 源田実「海軍航空隊始末記——発進篇」(文藝春秋、昭三六・九)一四七〜一五〇頁。高木前掲「自伝的日本海軍始末記」六四頁。

実松前掲「海軍大学教育」二二八、二二九、一三三〜一三四、一三八〜一四〇頁。前掲『証言録』海軍反省会(野元為輝証言)二二六頁。野元前掲「太平洋戦争の反省録」四九一頁。戸高一成編『証言録』海軍反省会4(寺崎隆治元大佐(一九〇〇—一九九六)証言、PH P研究所、平二五・二)一七五、一七六頁。寺崎もまた安岡を終生師と仰いだ海軍軍人の一人であった。同「私の人生観に影響を与えた師友」、『弘道 第九一〇号』(昭五九・六)二〇・二二頁。

(66) 広瀬豊「軍人小訓」(武士道研究会、昭二・一二)一三四頁。(67) 東京堂編・発行「出版年鑑 昭和七年版」(昭七・五)一〇六頁。他にも広瀬は、『岩波講座 教育科学 第五冊』(岩波書店、昭七・二)で「海軍の教育」を、『教育学辞典 第一卷』(岩波書店、昭一一・五)で「海軍教育」の項目を執筆し、「動もすれば近時の戦争は『器械の戦争』とか、或は『科学戦』とか云ひ、恰も古来からの兵術の原則は転倒せりなどと言ふ者もあるが、之を世界大戦に徴するも、開戦当初に於ける兵器の優劣の差は、間もなく均等となるものであつて、最後の勝利は矢張り道徳心にあること、決して疑ふべき余地はない」(後者一九二頁)等と、軍隊教育における道徳教育・精神教育の重要性を繰り返して説いている。佐藤卓己『言論統制——情報官・鈴木庫三と教育の国防国家』(中央公論新社、平一六八)二二五〜二二八頁を参照。(68) 校長・鳥巢玉樹中将(一八七七—一九四九)の招聘による。同人は広瀬前掲「軍紀の研究」にも序文を寄せている。前掲『証

「言録」海軍反省会4（棚田次雄元中佐（一九一〇—没年未詳）証言）六八、六九頁。

(69) 注(57) 参照。

(70) 「校長訓話」(昭七・一一・一)にて。『訓育資料第一三三号』「武
教小学」十道「士規七則」二就テ(海軍兵学校、昭八・二印刷)
一、二頁。校長在任中(昭六・一二・一〜昭八・二〇・三)に有名な
「五省」を創始、規範化させたことで知られる松下は、広瀬と海
兵同期(第三二期)でもあった。前掲『証言録』海軍反省会(寺
崎隆治証言)一三二頁。

(71) 『思想研究資料第一号 外来思想の史的考察』(昭四・? 印刷)
「例言」。

(72) 確認し得た限り(令四・一〇・一 現在)、本号は前掲『外来思
想の史的考察』から『思想研究資料第百五十一号 航南私記(海
軍中佐広瀬武夫遺著)』(昭一・二・三)まで一五一冊が、号外は
二五冊余が刊行されている。

(73) 本誌との関連性からいえば『思想研究資料第二十五号 歴代
御製選集』(中村孝也(一八八五—一九七〇)撰、昭四・二二印
刷)が目される。

(74) 同号二五〜二八、三三、三四頁。

(75) 米側資料による。防衛庁防衛研修所戦史室編『戦史叢書 ハ
ワイ作戦』(朝雲新聞社、昭四・二・二)三五九〜三六一頁。

(76) 草鹿龍之介『連合艦隊——草鹿元參謀長の回想』(昭二七・四、
毎日新聞社)一二二頁。

(77) 草鹿前掲『連合艦隊』一〇頁。

(78) 前掲『戦史叢書 ハワイ作戦』三四三〜三四七頁。

(79) 例えば池田清元中尉(一九二五—二〇〇六)は、「何事にもカッ
コよさを自負した海軍全体の、ひよわで自らの損失を恐れる悪
しき『スマート』な体質と、長期の物量消耗戦としての大戦争、
施設・資材ぐるみの総力戦を見通し得ない近視眼的な戦争観が
露呈している」として、「何事にも深く淡泊であることをモットー
にした日本海軍の不徹底性」を「武人的ロマンティズム」と
いう象徴的表現を用いて批判的に論じている。池田『海軍と日本』
(中央公論社、昭五六・一一)三五〜四八頁。一方で、当時の現
場ではハワイ作戦は南方(資源地域攻略)作戦の一環(補助作戦、
枝作戦)と認識されており、連合艦隊司令部より「地上までやれ」
との具体的命令も受けていなかったことから、「あの人「南雲忠
一または草鹿」のやったことは、あれで良かったんだ」とする
意見(千早正隆)もある。前掲『戦史叢書 ハワイ作戦』三四五、
三四六頁。前掲『証言録』海軍反省会4(寺崎隆治他証言)
三六七〜三七六頁。

(80) 草鹿前掲『連合艦隊』三七、三八頁。この時の決断の速さにつ
いて、源田実は「後日、草鹿參謀長から聞いたところでは、長
官と參謀長は、初めから「二次攻撃はやらない」と決めていた
とのことである」と証言している。源田『真珠湾作戦回顧録』(説
売新聞社、昭四七・一二)三〇六頁。

(81) 草鹿龍之介『一海軍士官の半生記』(光和堂、昭四八・一一)

一九三、二八八、二八九頁。

(82) 草鹿前掲『連合艦隊』三七頁。

(83) 前掲『土学論講』八三頁。草鹿は海大甲種学生二学年次(大

一四・二二・一〇大・一五・一一・二五)に、安岡の前述講演「文明(きのした・こういち／九州大学大学院比較社会文化研究院特別研究者等)

の帰趨と日本精神」と「幕末と武士道」を聴講した可能性があり、

また、寺本武治の前述講義「統帥」を聴講している。前者とは

同じ剣の流派に属し(注(25)参照)、後者とは少時に大阪の剣

道場で識り合い「内心尊敬」したことがあっただけに、いづれ

も格別な思いで耳を傾けたことであろう。草鹿前掲『一海軍士

官の半生記』四一〜四六頁。前掲『証言録』海軍反省会(野

元為輝証言)三〇七頁。他にも草鹿は、安岡の盟友・満川亀太

郎(一八八八—一九三六)が主宰する修養団体「惟神顕修会」

の立ち上げ(於靖国神社、昭一〇・九・三)にも参加し、理事に

就任している。福家崇洋『満川亀太郎——慷慨の志猶存す』(ミ

ネルヴァ書房、平二八・四)三〇五、三〇六、三二〇〜三二四頁。

(84) 草鹿前掲『連合艦隊』四二頁。前掲『戦史叢書 ハワイ作戦』

四一〇〜四一二頁。

(85) 草鹿前掲『連合艦隊』四七、四八頁。

(86) 『戦藻録 前篇——宇垣纏日記』(日本出版協同株式会社、昭

二七・一一)一一二頁。前掲『証言録』海軍反省会4(土肥一

夫元中佐(一九〇六—一九八八)証言)三三三頁。

(87) 前掲『戦史叢書 ハワイ作戦』四七八〜四八〇、四八二〜四八

五頁。防衛庁防衛研修所戦史室編『戦史叢書 大本営海軍部・

連合艦隊(2)——昭和十七年六月まで(朝雲新聞社、昭五〇

・一)三七四、三七五頁。